



←植物は着実に季節を感じて花を咲かせる。今年も江戸川の土手にツルボが花を咲かせた。

→やっと秋らしい天気になって人がたくさんやって来るようになった。

ヤゴが後ろに下がった。ほんらいトンボは前にしか飛ばないので縁起がいいと着物や手ぬぐいなどのデザインに使われてきた。

「そりやあ無理だよ、ヤゴはまだトンボになってないんだもの」

ヤッさんが横からそういつて話に割り込んできた。

ヤゴは漢字で書くと矢後。大相撲の十両に上がったばかりの力士だ。北海道芽室町の出身で、久々に北海道がうんだ力士だ。中央大学出身で大学時代に学生横綱をとり幕下十五枚目付け出しで相撲界にはいった。そういう意味で期待の力士だったが、その夢はみごとにくだけ、負け越した。

いきなり相撲の話になったが、大相撲が始まると矢切でも舟頭さんにヤッさんに私の三人寄れば、話題はもっぱ相撲が中心になる、

今場所は三横綱に二大関が休場という九十九年ぶりの場所だ。新しい力士が登場して期待は高まっていたが、角番大関の豪栄道が一人、先頭を突っ走っていたが最後のほうになって連敗をし

今週のクマ

→久しぶりに江戸川の堤防にあがって矢切の渡し方面を見つめるクマ。



→矢切畑に、年末に向けてキャベツの苗が植えられた。これから3か月ほどのあいたに大きな玉になる。



千秋楽に横綱の日馬富士とあたった。

「豪栄道にだけは勝たせたくない。できたら日馬富士に勝たせたい」

ヤツさんはいう。私も同感だ。豪栄道には勝たせたくない。

一年前に豪栄道は角番大関で全勝優勝した。そのときは単純に強いなと思ったが、そのあとは、ふたたび負けが続いていた。そして今回、やはり角番で十二日目まで一敗で優勝しそうな勢いだった。

「力を抜いて負け越しておいて、次の場所まで力を入れればいいんだ。ぼくにはそんなふうに見えるんだ。そんなの許せないよ、やっぱり」

私がそういうと、ヤツさんは、

「日馬富士は白鵬のように相手が土俵を割ってからだめ押ししなにかしないし、そこがいいんだよね」

「うちのかみさんなんか、ふだん相撲なんか見もしないのに、なぜか今場所は日馬富士を応援してるんだよなあ」

舟頭さんは、そういつて首をひねる。豪栄道が優勝しそうな勢いだというのにどうしてみんな反豪栄道なのだろう。

どこかに優勝させたくないという思いがあるのだろう。不思議な場所だ。